銀河の里
あまのがわ通信 58
2007年5月号

編集　社会福祉法人 悠和会
銀河の里 広報委員会
代表　牛坂　友美
発行　銀河の里
〒025-0013
岩手県花巻市幸田4-116-1
TEL(0198)32-1788
FAX(0198)32-1757
E-mail:yuyu@mx51.et.tiki.ne.jp

～ 眼差しに、見守られ、ぐんぐん育て。 ～

高齢者とワーカー共に、矢沢の畑でじゃが芋を植えた

継げるか農業　　－経験を積み、感覚を鍛える－

戸　來　淳　博

５月のゴールデンウイーク、私は田んぼの中にいた。一時的ではあるが私（戸來）が今年の稲作を担当することになった。「まさか、私が！」と言う気持ちもあったが、７年目にして「ついに来たか！」という気持ちの方が強かった。

あるスタッフが「今年の餅米はやっぱり戸來さんが植えるんですね。」と言った。グループホームの最初からの入居者で、里の農業をいつも気遣ってくれて、昨年の田植え終えたあと、８月に亡くなったＳさんへの思いを通信の記事で私は触れたからだ。Ｓさんの跡継ぎの役がやってきた。

いざ、動き始めると、やることなすこと失敗だらけ。田んぼに水を入れたところ、畦（クロ）の隙間の水もれに気づかず、決壊しそうになった時は、申し訳なくて目に涙がたまった。隙間は大きな穴となり、すさまじい勢いで水が流れ出ていた。そこに田んぼの持ち主アイさんが来てくれ、一緒に補修に取りかかった。理事長から「アイさんの言うとおりやれば止まるから。」と電話がくる。私は必死に土を運び、アイさんの言うとおりに置いた。時間はかかったが、決壊寸前で水は止まった。

私は田んぼに水さえためられない。アイさんの長年積み上げた経験と感覚は私には全くない。後からアイさんには「水入れる時はクロを塗り塗り（補修しながら）やるもんなんだじゃ。おめぇ一気に水入れるもんだからこうなったんだじゃ。」と言われた。また「やれば良いってもんじゃない。」と理事長からは言われた。

こなせばいいわけじゃない。それぞれの作業に意味があったり理由がある。それを作業としてこなすだけだと、失敗したり危険だったりする。一つのことが色々と繋がっている。その繋がりがわかることは自分自身の生き方にもかかわることだと思う。Ｓさんが伝えてくれようとしていたことにちょっと触れた様な気がする。

そんなこんなでまもなく田植えにとりかかる。高齢者に見守られ、ＷＳのワーカーと共に、鍛えられながら動く日々である。

カウンターマジック

GH1　前川紗智子

これまで私には、お店のカウンターは、何となく特別で少し近寄りがたい場所でしかなかった。ところがこの春、銀河の里で「悠和の杜」を開店した。障害者の自立と社会参加をねらった銀河の里の決死の取り組みなので、なんとかしなければと私もよくお店に顔を出す。たいてい一人で訪れるので、カウンターに座る。カウンターの向こう側に同僚先輩の牛坂さんがいるのも落ち着く。こうしてカウンターに座ってみて、カウンターという場所が持つ魅力を随分発見した。

たとえばカウンターの二つ三つ席を挟んだ向こう側に、私とは30も歳の離れた男の人が座っていたりする。普段だとこの人と会話をすることなど絶対と言って良いほどあり得ない。電車で隣に座ったとしても話どころか、顔さえみないで去ってしまうだけだろう。カウンターでは、初めは牛坂さんと私、牛坂さんとおじさんとそれぞれが楽しんでいる。それがいつのまにか３人の会話になり、そしてさらには私とおじさんのやりとりになっていたりする。

これは興味深い体験だった。お酒が入っているからなのか、人生とか人間とかに対する思い、価値観みたいな話になり、“あの本お前に貸してやろう”とか、“もっと飲もう”と距離が近づいていく。ある時、私はおじさんの話に何だか泣けて泣けて、二人硬く握手を交わしたこともあった。きっと端から見れば、？どこかおかしな光景なんだろうが…。

もともと、シャイで幾分小難しくて、社交的でない私が、世間という「外」で「人」と出会ったり、自分らしさをあふれさせるなんて事はあり得ないと思っていた。私が生きてきた世代と時代が、人間と人間を極力関わらせない、関わらない大きな分厚い壁をもっている。カウンターという場所はその壁がかなり薄くなるようだ。

この場合、カウンターの向こう側いる牛坂さんという存在が私にとっては決定的に重要な役割をしてくれていると思う。カウンターに立つ人は、本来はそこのマスターなど、店の顔であることはそういうことなのだろう。カウンターの中の人格に支えられて、安らいだ気持ちで座り、その人格を通じて、客どうしが、年齢も、職業も超えて平等にやわらかく、かつ深いところでつながりが生まれたりする。もちろん相手にもよるのだが、出会う前の想像とは違う、暖かくて不思議な出会いになる。人間とは上手に壁をくぐれば結構いいものなのかも知れないと私の人生に対する希望の火が瞬間ともったような気になる。

もちろんそうした出会いが日常に続いていくものとは限らず、むしろ一期一会だけれど、だからこそ暖かいものが心に残って、日常に作用してくるのではなかろうか。

私はグループホームの認知症ケアの現場に身を置いているが、カウンターマジックを経験しながら、それはケアの場においてかなり大切なことを示唆しているのではないかと感じた。カウンターの中から、牛坂さんが私に料理や飲み物を出してくれるように、直接のアプローチやサービスは当然大事である。しかし私とおじさんを出会わせたり、私を泣かせる物語を引き出すカウンターマジックの儀式における守り神としての牛坂さんの存在は重要である。

利用者は認知症を通じて、人生の生と死の時空を行き来し、家族や生きて出会った多くの人びとと再会や別れの重要な儀式を行っていくのではなかろうか。時空を超えた出会いと別れの儀式が深く進むべくカウンターマジックの揺るがぬ守り主として私はそこに存在していたい。

食彩空間
悠和の杜

心和む時・・・　心悠かな空間・・・
そんな、心と体においしい店

営業時間:ﾗﾝﾁﾀｲﾑ11:30～14:00　ﾃﾞｨﾅｰ 17:00～23:00
〒025-0085　岩手県花巻市双葉町２－１６
TEL & FAX:0198-23-6663

5月１２日より
ランチタイムスタートしました！！

☆和食御前（８品）１０００円
☆中華御前（７品）　８５０円

＋１５０円でソフトドリンク（ｺｰﾋｰ・ｺｰﾗ・ｶﾙﾋﾟｽ・ｳｰﾛﾝ茶等）が付きます。
両御前共に、週替わりのメニューとなります。

<イベントのお知らせ>
★二木てるみと星鴉宮のジョイント朗読会
日時：５月２１日（月曜）１９時開演
場所：食彩空間「悠和の杜」
内容：１。賢治作品の朗読（星鴉宮）
　　２。佐江秀一「江戸職人奇譚」
★旬を食べる会
日時：６月中（毎月１回開催予定）
場所：食彩空間「悠和の杜」
内容：月々の旬の食材を食べましょう！！

<好評！会席プラン>
3000円・5000円・10000円コース
料理の内容は、お客様のご要望にお応えします。
団体のお客様へは、送迎バス（28名まで）をご用意できます。ご相談ください。

ワークステージ「銀河の里」にて、仕出しや弁当を承っております。
また，お中元に餃子セットを販売しております。

餃子作りのニンニクを計る

大葉の種まき（大葉ハウス）

ハウスでチンゲンサイの収穫

機械を背負って田んぼに肥料を蒔く

じゃが芋植えで一服、休憩。

4月の里の一コマ

田植えの一コマ

高齢者と共に、
トマトの鉢上げ

年越しの椎茸の収穫

トマトの鉢上げ

早朝の苗運び、
年々増える手伝い人

じゃが芋植え後、
踏むと丈夫な芽が出る!?

恒例の花見の一コマ

別　れ

戸來　淳博

銀河の里のデイサービスとグループホームの間にはテラスがある。晴れた日にはテーブルと椅子を出してお茶を飲んだり、収穫物を干したり、さまざまな交流が行われる大切な場所である。目の前には小さな畑、向こうには棚田が並び、遠景には北上山系の連山を見渡す。その景色の中を農道が走り、家々が点在する。

７年前の開所当初から入居されていたＫさんは、よくこのテラスに出て、手すりに寄りかかりながら、その景色を長い時間一人で眺めていた。今年も春が来て、木々も色づき、テラスにも心地よい空気が流れ始める季節になったが、テラスにＫさんの姿はなかった。ここ数ヶ月、病状が悪化し、透析のため入院生活を余儀なくされていた。

夜、会議をしているところに「今晩が山」と家族さんから連絡が来た。長年おつきあいをさせていただいたスタッフとして急きょ病院に向かった。病室に入ると、娘さんと息子さん、親類の老夫婦がおられた。Ｋさんは天井の一点を見つめ、ベットに寝ていた。病状として改善は望めないことは知らされていたし、いずれはこの時が来ると覚悟はしていたとはいえ、涙が浮かんだ。Ｋさんの最期を厳かに見送りたいと部屋の片隅に居住まいを正した。

主治医は血圧計とパルス計を確認する。先ほど50だった脈は、40まで落ちていた。「ピッピッピ・・・。」という音と画面の波形。Ｋさんの死が、まじかであることをわかりつつ、Ｋさんの「生」が、電子音に変わり、波形になるのは薄っぺらなものに変えられるようで嫌な感じがした。みんな数値と波形に目を向けている。

そのなかで老夫婦はＫさんに寄り添い名前をよぶ。おばあさんが「目が動いたようだ。わかったんだべか？」といわれる。するとそばの看護師が「意識はもう無いと思います。」と答えた。その言葉に私の思いは行き場所を失ったような気がした。私は聞こえたんだと思った。

こんどはおじいさんが話しかける。「Ｋ子、俺もそのうちそっちに行くから、先に行ってまってろじゃ。」と。おばあさんは「あんたそっただこと」とたしなめる。私はそのおじいさんの死を受け入れた言葉に救われるような気がした。

できれば退室願えませんかと看護師から声がかかるが、誰も出ない。聞かないふりでとおした。看護師はアンビューをＫさんの口にあて、人工呼吸を始める。医師は心臓マッサージを始めた。胸を押され、ベットと体が揺れる。Ｋさんが今晩この世を立つだろう事は誰もが覚悟していたし、この処置が死を回避できる可能性もないことは解っている。まじないに感じるが医療関係者も辛いところだろう。

心肺蘇生が繰り返えされ、まもなく「ピー」という機械音と共に、パルスは０を表示し、波形はフラットになり、臨終が告げられた。

死を受け入れるには少し時間がかかる。次の日、Ｋさんのいつも佇んでいたテラスに出てみる。天気が良く、心地よいやわらかな風がふいていた。新緑が萌え、遠くには早池峰山が見えている。Ｋさんの一人佇む後ろ姿を思いうかべながら別れを告げた。

はじまりの日

ＧＨ２ 新スタッフ　伊藤　洋子

４月17日は豊子さん（仮名）の今年度の散歩のはじまりの日だった。豊子さんの散歩は冬場お休みになるらしく、この春からの新入職員の私は知らないのだが、豊子さんは散歩が大好きで、一人で夏場は午前中２時間、午後から３時間の散歩を毎日してきたという。

この日午後のおやつの後、Ｍさんはいそいそと上着を羽織り、外に出て行った。久々の散歩再開でもあり、今年は一人での散歩は難しいかもしれないとの話もあり、私は後を追いかける。風がやや強く、冷たく、淡い緋色の夕日がやけに綺麗に感じた夕方だった。

豊子さんは農道をてくてくと歩いていく。私は知らない道。Ｍさんの手を取り、半ば探検気分でついていく。話しかけてもＭさんは「ふふふ」と笑うだけで言葉はない。500メートル行った辺りでＵターン。「戻るのかな？」と思ったが、またＵターン。それが４回続く。

先にくたびれてきたのは私の方だった。豊子さんは楽しげに歩いていく。風邪が完全に治りきっていないのか、時折咳き込みながら、道路を擦る足音が少し大きくなってきても、それでも歩きつづける。４往復目の最後は側溝に沿って、道なき道を進み始めたので、私は慌てて、思わず「こっち行くの？」と尋ねる。その私の反応を笑いながら、がさがさと枯れ草と新芽の上を踏みしめ山の中に入っていく。

「この先はどこに続いているんだろう？」と不安になる私をよそに、豊子さんはどんどん進む。足元には生え始めた笹の葉。「夏は歩けないんじゃないか」と思っていると、あっさりと山から抜けてそこは施設前の道路につながっていた。ホッとしたのもつかの間、さらにあぜ道に入り、田んぼに沿って歩いていくので「今度はこっちなの～!?」と絶叫したが、豊子さんは私の慌てぶりはどこ吹く風で、笑顔のまま、まだまだ進む気配満々。

まいってしまっていると、スタッフが気を利かせて買い物に出かける車で声をかけてくれた。久々の散歩でＭさんも疲れたのだろう。すんなりと車に乗ってくれた。私は、買い物に行くスタッフにＭさんのことをお願いして戻ろうかと思ったのだが、車の中からＭさんが「隣に乗って」とばかり席をポンポンと叩き、誘ってくれた。Ｍさんが、同行者として私を捉えてくれていたと感じて嬉しくて一緒に買い物にもつきあった。

豊子さんとの散歩は、私にとってドキドキさせられるなかなかの探検だった。つぎはどこに先導していってくれるのか、どんな道を教えてくれるのか、ときめく思いである。

コメント：

豊子さんは過去３年間、夏場にはかなりの距離を一人で歩いて過ごしてきた。一日５時間歩く日もあり、その行動範囲は半径10kmにも及ぶ。国道から山道、あぜ道に至るまであらゆる道を走破せんかの勢いである。時計はみなくても時間は正確で出発も帰宅も毎日ほぼ一定である。事故のリスクは高くなるが、ご家族とも話し合い、歩くことに意味を認め、あえて散歩の禁止はしないことにしている。安全の為、GPSを入れたポシェットを持ってもらい15分おきにチェックをしてきた。その通信費用が２万円を超えた月もあった。昨年暮れに散歩中溝にはまり救急車で運ばれた。幸い大事に至らずその日に帰ってきたが、今後の散歩に関してどうするかスタッフとしては悩みどころである。新人の伊藤さんは手をつないで歩いたようだが、これは今までにはなかったことだ。手をつなぐ距離には行かせてもらえなかったのが実情で、他人が入り込めない豊子さんの独自の世界があった。しかし伊藤さんは大胆にもその世界に入り込み繋がっている。豊子さんにとってもそれが侵入された感じにはならずに同行者になった様子なのは、これまでを知っている者にとっては驚きである。入所当初の豊子さんは表情がほとんどなく、会話も成り立ちにくかったが、散歩中を通じて笑顔がほとばしる感じになっていった。最近はグループホームの中でも会話が成り立つことも多くなった。今回手をつないでくれたのは、これまでのプロセスを基盤に、新人の純粋な大胆さを受け入れてくれたからではないだろうか。新たな出会いがさらなる人生の旅を織りなすことを祈りたい。

（宮澤　健）

里の断章　～今月の里の一句～

GH2　戸來　美貴子

春雨に　やむならやめと　言うけれど　　傘下二人　降ってもいいか
春雨に　身を寄せながら　傘の中　ふれどふらねど　あなたと一緒
春雨の　あがる期待を　持ちながら　傘の中だと　二人でいれる
春雨に　降るなら降れと　思い切る　身を寄せながら　ひとつの傘に

雨の日だったが、一本の傘に入って私と利用者のＹさんとグループホームのゴミを出しに庭まで出た。ついでに山羊にもえさをやろうと足を伸ばし下の畑に向かう。二人とも動物は苦手だが、こわごわえさをやる「食べてる食べてる」「全部食べるかな・・・」

雨は一旦こぶりになったのだが、帰ろうとするとまた激しくなった。「やむならやめ！降るなら降れ！」とＹ子さん。「天気に言ってもしょうがないのにね」と笑い出す。

「天気にでもいいじゃない、思っていることを口に出すって」と私は思う。雨が降っても傘の下だから大丈夫。

土を踏み　長いーうね　進み行く　休憩しつつ　自然感じる
ジャガイモの　畝の長さに　一休み　青空仰ぎ　自分に返る

じゃがいもを植えた。その後土を足で踏み固めていく。見ていたミネさんに「土踏みに行こう」と誘うと、「長くつでねえから」と言う。「長くつあるよ」と渡すと「んだが」と履き替える。（数分前は「さあ、え（家）さ帰るべ」と言っていたが・・・）「いちにいちに」と声を出し、ひとうね歩き休憩。顔を上げたミネさん、一言「なげぇな」

再出発　～つながることの大切さ～

GH2 主任　板垣由紀子

私はこの春、移動でグループホーム第２に移ってきた。これまでは一緒に歩いたり、語りを聞いたり、心理的なやりとりが主だったが、今度は身体介護の要素が大きく、作業に流されているうちに一日があっという間に過ぎていく感じがした。ひとりの介助に入っていると、他の誰かを待たせたり、ほったらかしにしているような焦りを感じた。

ミエコさん（仮名）の歩行は、腰がすっかり引けて引きずられる感じになるので見ていても辛い。手を引いても、足が前には進まず、二人がかりの介助になる。グループホームでは限界で、機能訓練も整備された、適した施設があるのではないかと思いにもなる。

長くミエコさんを担当していたスタッフが、昨年体調を崩し急遽退職となった。その後のフォローが適切でなかったのは否めない。ご家族と今後について相談をしようということになった。話し合いの日は、毎月の外泊から戻ってくる日に予定された。その当日、外泊から帰ってきたところにたまたま私は庭にいた。なんと驚いたことに、車から、息子さんに手を引かれ歩いているミエコさんは、背を伸ばしニコニコと歩いている。おっかなびっくりで腰が引けて、曇った顔の歩き方とあまりに違っていた。

話し合いには、面識の深い前任者と施設長が臨んだが、話し合いのあと息子さんが居室に来てくれた時、もう何か感動しながら迎える自分がいた。息子さんの表情も明るく、その内容が想像できた。「これからもよろしくお願いします、皆さん腰を痛めないよう気をつけてください。」と挨拶され帰って行かれた。

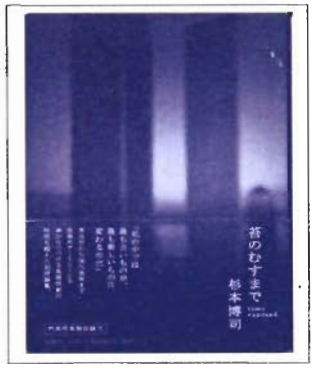
前任者も、「感動した、話せてよかった」と報告してくれた。御家族は、銀河の里でなくてはならない、他に預けるつもりはないといわれた。看護師の経験もある息子さんは、現状や実情をよくご存じなのだ。「家にいるときよりも表情がよくなった。ここしか考えられない」とまで言われるとスタッフ冥利に尽きる。ご家族の思いに支えられ、腹が決まる。

一緒に生きていくのだ。まだまだ繋がりたい。それから私は俄然話しかけるようになった。「立つよ、力貸してね、歩くよ、いい？ちょっと休む？疲れた？」檄を飛ばすこともある私の目を見ながら、ミエコさんもうなずいたり、文句を言ったり、やり取りが始まっていった。作業をこなそうとしていたときには、焦るばかりで、誰かを待たせているような、殺伐とした気持ちになりがちだったが、関わりが生まれてくると作業もスムーズになり目の前にいない人とも繋がりが感じられるようになった。スタッフのチームの質も問われる。利用者やスタッフを含めたグループダイナミズムも重要だ。今回はご家族の思いに支えられ、言葉を超えた何かで繋がっていくことの大切さを実感した。

この一ヶ月、ミエコさんはすっかり表情も目に力が戻ってきて、若がえった。その変容ぶりは訪ねて来た人を驚かせている。先日は、なんと一人で歩いてみせてくれた。行き先は当然キッチンだ。顔は生き生きと輝いていた。

グループホームでは無理ではないかとの感じから、ご家族との話し合いが転機になって、支えられたスタッフが新たな関係を生みだすことができた。繋がることの重要さを再確認した出発である。

書評　宮澤京子



・評論集『苔のむすまで』　杉本博司著　新潮社　　・写真集『歴史の歴史』　株式会社　六耀社

著者は、アメリカ在住の邦人写真家、美術作家である。日本文化と日本人に対する、真摯かつ新鮮なまなざしに驚かされる。この本の語りの深さは、在米40年、海外に居を構え、日本と日本人である自分を見つめ続けてきた年月の発酵のようにも感じる。ここまで日本を適切に語りうる人物は他にいないのではないかと思わされる切り口を持っている。「時空を超えた自由」を求める筆者の「魂」は日本の神話時代から現代を貫いて自由に行き来し、現代を見つめる。

日本にいる日本人は日本についてほとんど語れない。語ったとしても、迫力もなければ真実みがない。それはアイデンティティを考える必要のない国に住んでいるからではないか。自分のアイデンティティを考える前に、それは外から強制的におしつけられてくる。普通、日本人は、それを何の疑いもなく受け入れていく。「私」は必要ない。あるとむしろ生きにくくなる。世間様のような何ものかに包まれてふんわりとやっていればなんとかなる。そんな土壌で「日本人とはなにか」などという問いは問いにすらならない。

アメリカの「あなたは何者か」「私はなにものか」と、つきあいの前提として個を問いたださないでは始まらない文化のなかで、筆者は表現者として日本と日本人を意識し続けてきたのだろう。写真という装置を使って、「人間の記憶の古層」を探ってきたという彼の仕事は、時間を遡りながら、我々はどこから来て、どこへ行く存在なのかを問いつつ、日本人としての自身の発見に取り組んできたのではないか。

一昨年、六本木ヒルズの森美術館で行われた著者の展示会の中心には、通常の倍以上の長い橋がかりを持つ能舞台が設置されたという。橋がかりの長さは現代における異界と現実の乖離を表現しているのだろうか。筆者は本書の中で、能を「時間の流動化」としてとらえている。能の構成要素は、旅の僧、橋、夢である。旅の僧は橋を渡ることでこの世の時間の束縛から解放されて、ある種のトワイライトゾーンへ導かれる。主人公は歴史上の有名人で、源氏物語や平家物語、伊勢物語等の登場人物である。いわば日本人が全体で共有しているような**記憶の古層**だ。この記憶が夢幻能という形式で反復されることによって**共同幻想の劇的空間**が生まれる。観客が舞台をみつめている時間、僧が舞台上で旅している中世の時間、そしてその時間よりさらに数百年遡る亡霊の昔語りの時間。この３つの時空が**同一空間**の中で同時進行していく。能面は同一空間内の異時間を行き来するための装置として機能する。

主役（シテ）は、橋がかりに登場する前に鏡の間と呼ばれる部屋に在る。そこは楽屋ではなく神聖な儀式の空間であり、演者が面を着け、演じる霊魂が鏡を通してシテに乗り移る儀式の場である。死者の霊が仮面を通じて、演者のこの世の仮の身体を動かしめるのである。

能が構成し、杉本が希求する「時空をこえた自由」の精神が認知症ケアの現場にカケラでも存在するなら、妄想だの問題行動などと騒ぎ立てる必要はないだろう。認知症の世界は豊かなイメージに満ちている。時空を超え、自在に行き来する能力を「病気だ、異常だ、狂気だ」と決めつけるしかない現代の病理は深い。現代の日本人は西洋の光の文化に目をくらまされて、共同幻想の劇的空間に身を置く想像力も知恵も失ってしまったのか。現代は橋がかりさえ崩落した状況だ。私はワキの旅の僧が長い橋がかりを渡っていく姿を現場のスタッフに重ねつつ、現代の橋がかりとしての使命をグループホームに感じる。

2001年、銀河の里が始まったその年、9.11に人類の課題を突きつけた事件が起きた。この本のカバーには事件の３年前に撮影されたワールドセンタービルが亡霊のように映っている。そのカバーの裏は千手観音がびっしりと克明に印刷され並んでいる。カバーがインスタレーションになっている。現代の祈りと癒し、時空の超越、異界との行き来といった、この本と杉本の挑戦は、銀河の里のテーマにそのまま通じる。

里の行方

理事長　宮澤　健

利用者と出会うことで「人間とはなにか、生きるとは何か」を随分考えさせられてきた。まさに導いてもらってきた感じで感謝しきれない。里のスタッフそれぞれもそうした感じを実感として強く持っていると思う。

ただ、そうした思いを書いたり伝えたりするが、ほとんど反応がないのは寂しい。現場では基本的で、重要なことだと思うのだが、「小難しいことを考えて馬鹿じゃないの」といった、めんどうくさそうに厄介者を見るような目が大半だ。実際「また言ってる。あきれる」と言われたこともある。聞きたくもないというのだ。

「福祉は、どうでもいい人や、終わってしまった人や、役に立たない人をお情けで面倒見てあげるのだから、よけいなこと考えるんじゃないよ」という意識が基本にあり、市や県の行政はじめ、同業者もほとんど徹底して貫かれている。そうした意識から来る圧力との闘いに、かなりの労力を浪費するのが現状だ。

焦りにまかせて昨年は内部で「最後の10年、最初の10年」と銘打ってセミナーをやった。私にとっては社会人最後の10年、20代のスタッフにとっては最初の10年という意味だ。人材育成塾と、遺言を語るつもりで張り切ったが、退職者続出となった。ついて行けないということなのだろうか。さらに落ち込む。

「勉強すれば楽に生きられる」と、大人はここ何十年もかけて子どもに言い続けてきた。考えなくても、悩まなくても楽に生きていける社会を必死になって作ってきたのに、今更「悩み、考えよう」などという方が無理なのか。「福祉くらいは考えよう」と言っても嫌がられるのは当然かもしれない。楽ができると思って社会に出たのに「悩んで、苦しめ」と言われるのでは話が違うということなのか。

心を使わないですむ便利な社会は、表面はいいようだが、味気なく、生きた実感が薄く、傷つきやすく、どこか辛くなる。生きるエネルギーが枯渇していくのだ。

一方こうしたことに気づき、考えている人のなかに、里を注目してくれる人が増えて来ている。「夢だった銀河の里が実現する日本は捨てたものじゃない」と言ってくれる社会学の先生、「お前らには哲学がある。これからの福祉は哲学がいる」と言う考古学の大御所。日本で一番のグループホームはどこかと聞いたら「銀河の里」と言われて訪ねて来た日経新聞の記者。そう言ったのは東京研修センターのN先生らしい。認知症のドキュメンタリー等を多く手がけてきたNHKのディレクターは２日間泊まり込んで、「里の存在は私の支え」と言ってくれた。「賢治の精神の実在を里に見る」と最大限の讃辞をくれた賢治ファンの臨床心理士の先生。「対象化せず当事者性を生きている」と社会心理の先生。それぞれに長年、現場で取り組み、人間が生きることを真摯に考えて来た人たちだ。そういう人たちに支えられ、助けを借りつつ、システムや制度を超えて、心豊かなネットワークで繋がりながら、いい仕事をしていきたいと思う。

スタッフの傾向も、暖かい人間へのまなざしを持ち、深い思索を重ねる方向に収斂されつつあるように感じる。それはシステムで一丁あがりの片を付け、楽を求める方向とは対局の悪戦苦闘能力を必要とするが、スタッフ個々の覚悟の奮闘に未来の希望を託したい。

＜里の連絡板＞

☆　「銀河の里」　＆　「悠和の杜」　ホームページ新規開設しました！

http://www.ginganosato.com

里のホームページには、日々更新する各部署のブログを掲載。また法人、各部署のページを始め、毎月発行する通信や人材確保のためのリクルートのページも増え、見応え十分。悠和の杜は、里のページから入ることが出来る。店のコンセプトから、店内のスポット写真、メニュー、手作りぎょうざが出来るまでをおったページも掲載している。里で生産したものの販売ページで、餃子やシュウマイ、銀河米等々注文できます。ぜひご利用ください。

編集後記

５月１２日、田植えスタート。石鳥谷にある３町歩の田んぼの田植えを２日間で終える。普段なら３．４日はかかるのだが、例年にない早さである。育苗箱への水掛は、高齢者のスタッフが当番制で行った。立ち枯れの危機も脱し、無事田植えを迎えた。また同じく１２日、杜の方ではランチがスタートした日であった。前日まで準備で大わらわ。体制を整え望んだものの、当日の利用客は７名。この日、今年を掛ける勝負の日が始まったのではないだろうか。一日一日があっという間に過ぎ、そうとうのエネルギーを使っている。あまのかわ通信を読まれている方とのやりとりが、今後の奮闘記のエネルギーとなっていけばと思っています。是非とも、ご感想、ご意見をお寄せ下さい。　（戸來）